

## ■「ちくま評論入門」解説 読解問題への過程

## 26 市村弘正「失明の時代」

## ■目標 深刻な問いを受け取る

## ■追跡

① 画面に一個の錠剤が映しだされる。どこから見ても薬物に見える。それが恐るべき毒物に変質することを映画『薬に病む——クロロキン網膜症』（一九八〇年）は明らかにしてゆく。私たちが生きるこの社会は、薬物から毒物へとたやすく逆転し変貌するようない社会なのだということ、いや、そのような危うさをこそ基礎とすることを、画面は静かに真正面から提示する。この錠剤はクロロキン製剤の丸薬である。この「薬品」が一体どのようなにして、日本社会に生活する人たちの身体のなかへと浸透することになったのか。映画は、その読解問題4歴史的な出自と社会的な経路とを明らかにする。

問題提起の段落。問いをつかもう。

薬が毒物になる。それが『薬に病む——クロロキン網膜症』という映画のタイトルが示すことだ。筆者はその映画のメッセージを「この社会は、薬がたやすく毒に変わることを基礎としている、危うい社会だ、という」と捉える。

読み手はいくつかの疑問を持つ。

クロロキン網膜症とは？ 薬がたやすく毒に変わることには「基礎をおく」社会とは？

そして、クロロキンなる薬がどのように浸透したというのか？

これらの問いを携えて、読み進む。

② クロロキンという薬物は、一九三四年にドイツで合成開発され、一九四五年にアメリカで抗マラリア剤として再発見されたという経歴をもつ。その日付に注目すれば、この薬物の身元は明瞭だろう。世界大戦が種々様々の化学薬品を生み出したことを、私たちはしっかりと記憶にとどめておかなければならない。したがって、この薬物が戦後の日本社会で大量に製造され販売されたとき、それは腎炎の特効薬として、いわば市民社会に向けて変身した姿形で現れたのだった。言いかえれば、私たちが生きる「市民社会」とは、このような戦時体制の遺産をひそかに、あるいは公然と引きつぎながら、変態をとげたものであった。そのことを、この薬物が辿る「戦後史」は冷酷に教える。

「その日付に注目すれば」とはどういうことか。一九三四年のドイツとは、ナチス・ドイツ（一九三三～一九四五）の時代。一九四五年とは第二次大戦が終わった年。アメリ

- 1/12 -

力がナチスの開発した薬品を再利用する道を開いたということだ。

毒性の強さで使われなかった薬（毒）が、マラリアの「薬」に変身し、さらに腎炎の薬として日本に広まる（しかし、実際には腎炎には効かなかった）。

私たちの社会には、見えない形で、「戦時体制の遺産」が引き継がれている。今使われている薬がそもそも戦争の中で開発されたものだという例は他にもある。「征露丸」の歴史を調べてみるといい。

（参考）映画の概要

薬に病む クロロキン網膜症

警告されていた薬

クロロキンは抗マラリア剤としてドイツで開発されたが、強い毒性のため使われなかった。その後、第二次大戦中にアメリカが抗マラリア剤として再発見し、マラリアに限定して使用された。日本では一九五五年以来、製薬4社によって大々的に発売され、マラリアだけでなく、腎炎などの適応薬とされた。一九五八年ごろからアメリカでは失明の危険が医学誌などで警告され、一九六四年には全米の医師に警告書が発送されている。

クロロキンが人生を変えた

しかし、折から日本は薬の高度成長期。一九六一年に始まった国民皆保健制度が薬の使用に拍車をかけた。製薬業界が一九七〇年以後、一兆円産業とふくれあがる一方で、クロロキンを使用した人たちに視覚障害が開始する。しかも、薬の使用をやめても障害は進行し治療方法もない上、腎炎にも効果がなかった。

視覚障害ゆえに転職、失業がつづく。結婚もあきら

③ クロロキンは市民社会に合わせて変貌しただけではない。それが一九六〇年代、とりわけその後半の日本社会に集中して現れた、というもう一つの日付がある。映画に登場するクロロキン網膜症者のほとんどが、一九六五年頃から七〇年にいたる時期に大量に投薬された人たちなのである。その人たちの視力を剥奪し視界を破壊するほどの大量投薬がなされたということ、それは急成長し膨張する医薬産業の存在なしにはありえないだろう。それを保護し支援する社会体制なしには不可能だろう。このようにして一九六〇年代の社会に暮らす人々の身体のなかへ、この薬の装いをもつ毒物は浸透していった。すなわち、この人たちの極限まで狭められた視界が映しだすのは、日本経済の高度成長過程そのものなのである。

高度経済成長が、この薬害を生んだ。薬害は、たまたま、ある人たちの誤りによって起きるといえるものではない。社会の体制が、薬害を生む。逆に言えば、薬害という現象の裏側を探れば、社会の問題に突き当たる。

しかし、ここで問いたくなる。

める。家族の中に自殺者も出る。日常生活では見ようとする物に顔をこすりつけても見えにくく、手さぐりで判別しなければならぬほどの視覚障害。クロロキンは人生を変えてしまったのだ。

薬害事件の本質に迫る

このクロロキンの拡販の根拠となった論文は症例もわずかで比較実験もしない。製薬会社の元宣伝販売員も「一日一度手錠がはまるようなことをやらないようでは一人前ではないといわれていた」と語る。アメリカで警告が発せられ、日本の学会で被害が検討された時、自分だけ服用をやめ、行政官として公にしなかった厚生省製薬課長の取材拒否の電話で映画は終わる。

薬害事件は情報の欠陥からおきる。その背景には製薬企業と国の情報独占がある。この映画は「クロロキン」という薬の薬害事件の歴史をふり返りながら、薬害事件の本質を探っている。

青林舎／一九八〇／一時間四七分／監督・小池征人／製作・青林舎／クロロキン原告弁護団



のエピソードではない。

これらの問いかけは本質的である。「誰がどのように何をしたのか」「それぞれは何をしなかったのか、なぜしなかったのか」。

交通事故とは違う、というのは、これが、社会の構造と関係しているからである。個々の役人や医学者の問題を越えて、社会自体が、薬害を推進する動機としくみを持ち、止めるしくみを持たなかった。それは、同じような種類の悲劇を、この社会が反復する可能性を示している。

どんな人も、何らかの社会的行為をおこなう。特別な地位にある人だけの問題ではない。自分が一体、今、何をしているのか。していないのか。何かに目を瞑っているのではないか。これは、社会へ出て働くようになったとき、実感することになるであろう問いかけだ。

⑧ ここには、中身を問わず何事かを行うこと、何かをつくりだすことそれ自体に対して肯定的な社会が前提されているのである。高度成長社会とはそれが極度に加速された社会にほかならない。企業は膨大な量の薬品を製造販売し、役所はそれを後押しし、学界はそれに関する論文を生みだし、病院はその薬物を大量に使用する。正負を問わず間断なく物を生みだしつづけること、その物件の増大が経済成長の中身となる。つくりださないこと、生みださないこと、差し控えることは、この社会では文字どおり否定的な「無為」以外のものではない。このような行為基準のもとに社会を押し進めるとき、そこに何が生まれるかを、この映画は痛切に教える。数千人といわれるクロロキン被害者は、「行為」の集積によってつくりだされたのである。

「ものを生み出し続ける・何かを行為し続ける」。止まることは悪だ。行わない人間は不要だ。PDCAサイクルを回せ。plan・do・check・act！行為し、回し続けることが、経済成長につながるのだ。売ればよいのだ。作って、売って、消費して、あらゆるものをぐるぐる回せ。回すこと増やすこと自体が目的だ。それを作って何になる？などと考えるな。リスクを怖れては何もできない。回せ、回せ。

この社会に響き渡るメッセージ。  
「自分の人生をPDCAで回す。その対象は24時間365日、自分の人生の全てである」(堀江貴文)

⑨ たえず何事かを行うことを肯定する社会は、厚生省や製薬会社や病院の加害行為をくいとめられないだけでなく、現在の私たち自身におけるように健康イデオロギーの強迫、すなわち自己への加害から逃れられないだろう。それは、薬物服用を主とする健康のための「行為」へと私たちを駆りたててやまない。しかも、そのための手立ては専門家集団によって独占されているのだ。この映画を観ながら、網膜症に冒されたのが私自身ではなく

彼らであったのは、紙一重の事情の違いにすぎないと思わざるをえないのは、この社会体質の遍在性のゆえである。

健康イデオロギーの強迫、自己への加害、とは何のことか。「薬物服用を主とする健康のための『行為』」。自分のからだは「健康」でなければ、社会から見捨てられる。行為せよ、の声は、健康であれ、という声と重なる。

世に溢れるサプリメント、薬品、健康法。もはや、そういう健康的行為を何もしない社会人はいないのではないか、と思われるほどである。長く服用していたものについて、あるとき、じつはそれには重大な副作用があつて……と告げられない保証はない。

行為せよ、行為できる健康体であれ、この声が社会の至る所で響く。

⑩ 一個の錠剤があぶりだしてゆく情景はどのようなものであるか。それは何よりも現代という時代において経済社会が帯びる、身体的振るまいとでもいべきものである。そこには、関係の基礎をなすべき信頼によって仲立ちされない「社会」のあり様が、残酷な私たちで露わになっている。それは、被害者の一人が言うように、「もう人ば信用するちゅうことができんことなつた」社会である。私たちが生きている社会は、いかに凄まじく恐るべき場と成り果てていることか。それはまさしく荒地といっている。しかもそれは、読解問題2荒地であることの自己意識なき「荒地」というほかならないものである。そうでなければ平然と他人に苦痛を与えつづけ、自分自身を含む社会関係の破壊を押し進める行為に、集団的に加担するなどと振るまいは考えられないだろう。「信用」の暴力的な毀損は、社会関係を寸断し破片化するだけではない。それは社会の核を腐蝕しつづけることによって、その破片を無力化し全体へと組みこんでいくのである。

**読解問題2** 「荒地であることの自己意識なき「荒地」とあるが、「荒地」とは「社会」のどのようなあり方を指すのか。「身体的振るまい」と関連させて説明せよ。

ことばづかいが難しく感じる。そんなとき、☆なんやそのままやんか式を使ってほしい。それってどんな荒地なの？という問いに対して、とりあえず、そのままの形で、「自分が荒地である(ひどいことをしている)」という自己意識がない荒地だ(ひどい振るまいだ)ということ。」と書く。

その「荒地」とは、ひとがどんな振るまいをする場所なのか。次の一文がそれを示している。

「平然と他人に苦痛を与えつづけ、自分自身を含む社会関係の破壊を押し進める行為に、集団的に加担する」という振るまい」

自分のことばで(翻訳)してみよう。こんなひどいことをしていることを自覚していないようす。こんな枠組に入れてみる。

解答例1「みんなによってたかって、平然と他人に苦痛を与え続けることによって、人が人を信頼できない社会にしてしまい、しかも、その社会関係の破壊が自分自身にも返ってくることに気づいていないありさま。」

解答例2「自分の行為が、他者にどのような苦痛を与え、また、自分を含む社会関係をどれほど破壊してしまうかについて、何の自覚もない人々ばかりになっているさま。」

⑩ 大量の化学薬品は、個々人の間の信頼関係の喪失ないし欠如を前提として、そこに介在し流通する。そしてそれが流通すればするほど、その不信感を増幅しつづける。この前提と帰結とはおそらく二〇世紀という時代を貫く固有の運動過程をなしている。クロロキンが世界大戦——すなわち従来の社会関係のあり方を根こそぎする総動員の戦争——に出自をもつことの社会的含意を改めて想起しなくてはならない。薬害を生みだしつづける社会とは、二〇世紀という時代の刻印を色濃くおされて産み落とされ、戦後の成長過程のなかで自己増殖をなしとげた社会なのである。

二〇世紀固有の運動過程とは何か。信頼関係のないところに、ものが流通する。ものの流通がさらに信頼を破壊していく。

先の段落と合わせれば、この信頼関係のなさは、「平然と他人に苦痛を与えること」とつながっている。総動員の戦争、では、自分たちが生産しているものが、戦争においてどんな苦痛を人に与えるか、その想像力は衰弱する。そのしくみがそのまま、この薬が毒になる可能性への想像力を持たないままに、生産し、販売し、投与してしまう社会として再現される。

⑪ この経済社会の振るまいは、物事を徹底的に対象として扱う思考の帰結でもある。人間が自分たちをとりまく世界を対象化し、切り分け、支配統制することの上のみ存立してきた社会は、ここでその運動のほとんど極限的な事態を生みだすことになる。ここでは「人間」自身が、どこまでも対象化されつづける。「人体」という実験対象として、また薬物投与の数値対象として、一方的に対象化されつづける。それが相互性をもちえないことを、クロロキン網膜症者におけるほど残酷に示す場所もないだろう。暴力的に視力を剥奪されることによって、この人たちは文字どおり見られるだけの対象に貶められているからである。

「対象化」という語に注意。ものごとを、自分と切り離し、距離を取り、観察したり、支配したりするものとして扱うこと。自分が見るもの、であるが、対象は一方的に見られるだけのもの。この文脈では、「人体」もまた、経済社会にとっては、商品として利用される場に過ぎない。「人体は健康でなければならない」。そこに〈ビジネスチャンス〉が生

まれる。

⑫ 人間を対象とみなし、それに向けて薬品を大量に投下するというこの行動様式は、まぎれもなくこの世紀のものである。それは社会のなかに、あるいは人間のあいだに、読解問題3 隙間や余白を残すことを許容しない思考様式によって促されている。総動員の思考である。そのような空隙は患部とみなされ、根絶されなければならない。この社会的患部の発想はそのまま患部に向けるだろう。それは治癒する肉体でも病気とつきあう体でもなく、根絶されるべき対象となる。根絶といい根絶といい、その余すところなき「根こそぎ」の発想は、皆殺しの思想といっている。全体主義的思考そのものである。このような思考が個々人を襲い、その身体に投下される。身体は放置されることはないのだ。

読解問題3 「隙間や余白を残すことを許容しない思考様式」とあるが、そのような思考にとつて、隙間や余白とはどのようなものか。「総動員の思考」「全体主義的思考」と関連させて説明せよ。

抜き出しでは書けないので、関係する箇所を取り出して、組み立てる。「そのような空隙は患部とみなされ、根絶されなければならない」が出发点。「そのような思考」とは、「人間を対象とみなし、それに向けて薬品を大量に投下する」ような思考。隙間とは、患部Ⅱ根絶されるべき場所。

・そのような思考にとつて、隙間とは、患部（取り除くべきもの）である。  
 ・「総動員の思考」「全体主義」にとつても、隙間とは、利用できない〈患部〉である。  
 この二つを重ねる。

解答例1「人間を対象とみなし、それに向けて薬品を大量に投下するという考え方にとつて、隙間や余白とは、患部を意味し、薬によって根絶されるべき場所である。それは、利用できるものは残らず利用する「総動員の思考」や、役に立たなかったり、敵対したりする存在を排除しようとする「全体主義的思考」が根絶やしにしようとする対象と重なっている。」

解答例2「人間に薬品を大量に投与するという考え方にとつて、余白とは、患部、すなわち根絶すべきものであるが、それは、「総動員の思考」や「全体主義的思考」にとつて、利用できず、邪魔になるものと同じである。」

対照的に書き込まれているのが「治癒する肉体」「病気とつきあう体」である。これは、いわゆる「病気」の状態を、排除するべき患者（対象）とだけ見なすのではない発想がある。これを社会の次元で考えれば、異分子を排除する発想と多文化を包摂しようとする発

想の違いとなる。

⑭ 「働きたいんです。とりあえず働いて……どういったらいいんですかねえ……病気のこともなんか忘れて一生懸命働こうとしてるんです、ぼくは。それを病気がじゃまして、働かさないように働かさないようにするんです」。これは、網膜症のほかに難聴や手のしびれや頭痛などの薬害に苦しむ、まさに手足をもがれた元造船所の労働者の言葉だ。この高度産業社会は、自分の基礎を食い破りながら膨張してゆく。体を動かして働きたいという欲求すら破壊していく社会は、自らの未来を食い潰すほかないだろう。そしてその負債を、もっとも脆弱な者たちの苦難において一時的に決済しながら進行するのである。

「もっとも脆弱な者たちの苦難において一時的に決済しながら進行する」という部分は、重く、また、リアリティをもつ。この事態は、現在も進行中だからだ。

弱いものを犠牲にして、ある者たちだけが生き残るという図を、私たちは今も見せつけられている。

**読解問題 4** クロロキンが浸透する「歴史的な出自と社会的な経路」とあるが、その観点から、全文を二〇〇字以内に要約するとともに、表題「失明の時代」にこめられた意味を、一〇〇字以内で説明せよ。

●要約

一つの方法。二〇〇字なら、五〇字×四文、と決めてしまう。全体を四つの部分に分けてみる。二つでも三つでも、分けようと思えば分けられるが、そこに悩む前に、まず四、でやってみる。たいてい、うまくいく。

問いは、クロロキンが浸透する歴史的な出自と社会的な経路とは？だから、クロロキンがどのように現れたか、それが社会の何を表しているか、を軸に整理する。

- ・ ポイントを抜き出し（印をつけ）
- ・（各パートの）要約メモを書き、
- ・ くつつけて、推敲。

○一。クロロキンの映画の紹介部分から、各形式段落のほぼ終わりの文。

・ 私たちが生きる「市民社会」とは、このような戦時体制の遺産をひそかに、あるいは公然と引きつぎながら、変態をとげたものなのであった。そのことを、この薬物が辿る「戦後史」は冷酷に教える。

・ この人たちの極限まで狭められた視界が映しだすのは、日本経済の高度成長過程そのものなのである。

・ この投薬の期間といい、錠剤の数量といい、まさしく常軌を逸している。それが、この

社会の姿形なのだ。

・ これが物理的な計量と計算を規準とする社会、つまりこの測定社会が産み落とした事態なのである。

クロロキン薬害は、戦時体制を引き継いだ日本の高度成長過程で、生産と販売だけを目指した社会が産み落とした被害である。

○二。この社会はどんな社会か。

・ つまり、この社会における「行為」のあり方を問わなければならないのである。

・ ここには、中身を問わず何事かを行うこと、何かをつくりだすことそれ自体に対して肯定的な社会が前提されているのである。

・ たえず何事かを行うことを肯定する社会は、厚生省や製薬会社や病院の加害行為をくいとめられないだけでなく、現在の私たち自身におけるように健康イデオロギーの強迫、すなわち自己への加害から逃れられないだろう。それは、薬物服用を主とする健康のための「行為」へと私たちを駆りたててやまない。

この社会は絶えず何かを行為することを強い、健康もまた強いられている。

○三。そんな社会がもたらすもの。

・ そうでなければ平然と他人に苦痛を与えつづけ、自分自身を含む社会関係の破壊を押し進める行為に、集団的に加担するなどという振るまいは考えられないだろう。「信用」の暴力的な毀損は、社会関係を寸断し破片化するだけではない。それは社会の核を腐蝕しつづけることよって、その破片を無力化し全体へと組みこんでいくのである。

・ 大量の化学薬品は、個人間の信頼関係の喪失ないし欠如を前提として、そこに介在し流通する。そしてそれが流通すればするほど、その不信感を増幅しつづける。

過剰な行為は、信頼関係を破壊し、社会全体の不信感を増殖し続ける。

○四。

・ この経済社会の振るまいは、物事を徹底的に対象として扱う思考の帰結でもある。人間が自分たちをとりまく世界を対象化し、切り分け、支配統制することの上のみ存立してきた社会は、ここでその運動のほとんど極限的な事態を生み出すことになる。

・ 根絶とい根絶とい、その余すところなき「根こそぎ」の発想は、皆殺しの思想といつていい。全体主義的思考そのものである。

・ この高度産業社会は、自分の基礎を食い破りながら膨張してゆく。体を動かして働きたいという欲求すら破壊していく社会は、自らの未来を食い潰すほかないだろう。そしてその負債を、もっとも脆弱な者たちの苦難において一時的に決済しながら進行するのである。

ここにあっては、物事を徹底的に対象として扱い、利用し、不要なものを犠牲にする全体主義的思考である。しかしそれは結局自分たちの基礎を破壊し、未来を潰している。

解答例(要約)

クロロキン薬害は、戦時体制を引き継いだ日本の高度成長過程で、生産と販売だけを目指した社会が産み落とした被害である。この社会は絶えず何かを行為することを強い、健康もまた強いられている。過剰な行方は、信頼関係を破壊し、社会全体の不信感を増殖し続ける。ここにあるのは、物事を徹底的に対象として扱い、利用し、不要なものを犠牲にする全体主義的思考である。しかしそれは結局自分たちの基礎を破壊し、未来を潰している。

(二〇〇字)

●表題「失明の時代」にこめられた意味

比喩の問題。「失明」とは？ 見えなくなる、ことについて、いくつかの場所で触れられていた。設問の答えも参考になる。

・(解答例) 測定不能という文字は、薬害の可能性を測定し予測できたはずの社会が、その責任を放棄する冷酷さを示す。

・(解答例) 自分の行為が、他者にどのような苦痛を与え、また、自分を含む社会関係をどれほど破壊してしまうかについて、何の自覚もない人々ばかりになっているさま。

・(本文) 暴力的に視力を剥奪されることによって、この人たちは文字どおり見られるだけの対象に貶められているからである。

・(本文) 体を動かして働きたいという欲求すら破壊していく社会は、自らの未来を食い潰すほかない。

「失明の時代」とは、「この社会は失明している」と言い換えられる。さらに、「この社会は、何かを見ていない、見ることができなくなっている」といえる。

初めの二つは、利益第一主義の経済社会が、他者への苦痛やその予測を見ていないことをいっている。三つめは、社会が、人間を儲けの対象としてしか見ていないことを、四つめは、利益しか見ず、人間を切り捨てていく社会は、社会の基盤となる人間そのものが損なわれ、社会が未来に向けて継続できなくなることが見えていないことをいっている。

解答例1「儲けの対象としてしか人間を見ず、社会の基盤となる人間そのものを損なうことが、未来を構想することを不可能にすることに、経済社会は、気づいていないという意味。(七七字)」

解答例2「クロロキン薬害被害者の視野に障害が出ることに、経済社会が、社会の基盤となる人間を損ないながら暴走し、社会全体への視野、未来への視野を失っている状況を重ねている。(八〇字)」

■読解問題

1 『測定不能』という衝撃的な文字が現れてくる」とあるが、どうして「衝撃的」なのか。

2 「荒地であることの自己意識なき「荒地」とあるが、「荒地」とは「社会」のどのようなあり方を指すのか。「身体的振るまい」と関連させて説明せよ。

3 「隙間や余白を残すことを許容しない思考様式」とあるが、そのような思考にとつて、隙間や余白とはどのようなものか。「総動員の思考」「全体主義的思考」と関連させて説明せよ。

4 クロロキンが浸透する「歴史的な出自と社会的な経路」とあるが、その観点から、全文を二〇〇字以内に要約するとともに、表題「失明の時代」にこめられた意味を、一〇〇字以内で説明せよ。

■発展問題

この他の薬害について調べ、本文をふまえて、考えたことを論ぜよ。

●重要語「対象化」＝距離を取って物事を見る。本文では、悪い意味で使われていたが、文脈によってはそうではない。冷静に突き放して観察する、といった意味合いでも使う。自分をいったん対象化して眺めてみる、とか。

経済社会の中にいると、経済社会を対象化して眺めてみるものがなかなかできない。自閉する。おそらく経済システムの中で、経済について考えても、必ずシステムに回収されてしまうだろう。外に出る手はあるか。あると思う。というより、じつはすでに外にいるのかもしれない(よ)。